安楽寺だより

平成３０年　夏秋　№３２号

わしひとりをめあての本願のありがたさ

花岡大学

暑い夏が早く終わってほしいと思いながら夏が終わりをつげると、寂しい思いにもなってしまいます。皆様方は、いかがお過ごしでしょうか。

さて、夏の初めに大雨が降って、中国地域に大きな被害をもたらせました。大変な災害でありましたが、その時に驚きの出来事がありました。それは、オウム真理教麻原彰晃の死刑執行がおこなわれたことです。

死刑制度に関しての議論や、一度に七人もの執行を行うことの意義、まだ真相はまだ解決されていないという、さまざまな意見が飛び交いますが、執行がなされたいま、近年稀にみない凶悪事件の区切りになることは事実でしょう。今後は多くの被害者のためにも事件を忘れないでおくことが大事なことかも知れません。

当時、特に私は、大変憤慨しておりました。それは、坂本弁護士事件で小さないのちも失いました。ちょうど自分の子も同じ年頃でしたので、宗教者が人を殺して正当化することへの怒り、また宗教を偽り、仏教を偽った極悪テロ集団への嫌悪の気持ちでいっぱいでした。

その時、現在真宗学の先生をしている友人と話をしていますと「阿弥陀さまは麻原を救おうとするものか？」という話題になりました。私はオウムに対して怒りの気持ちしか持てません「阿弥陀さまに救われてたまるか」という思いでいっぱいです。しかし、友人は、「それでも阿弥陀さまは救わんとはたらきかけておられる」と諭していました。私は「そんなのない、フン」と顔をそむけていました。

それから、数年たったある時、法然上人在世時に京都に「耳四郎」という大罪人がいた話を聞きました。

耳四郎は、強盗、殺人、火付けなど悪の限りを尽くす大悪党です。ある日忍び込んだ屋敷でたまたま法然上人の説法を聞きます。説法の後、法然上人とばったり鉢合わせします。

耳四郎は、「やい坊主、やい法然、さっきすべてのものが救われるといったが、この大罪人の俺でも救われるというか」とたずねるのです。法然上人は「お念仏で救われます」と応えます。「それはなぜか」と問いただすと法然上人は「この私が救われるからです」と告げます。耳四郎は、仏とこの私との間にはなんの障りは存在しないとこに気付いたのでしょう

その後はお念仏と共に生きていきます。

もし私が耳四郎に質問されたら。まず逃げてしまいますが、それでも応えるとしたら「お前みたいな大悪党でも救われるかもしれんな」と言うのでしょう。「お前のような」です。「この私」がぬけ落ちます。

阿弥陀さまの救いに、「この人がよくて、この人はだめ」ということはありません。麻原も例外ではありません。

しかし残念ながら、仏さまの声は聞けなかったようです。麻原には謝罪の言葉がありません。慚愧なくして救われることはありません。謝罪があれば、残された信者の方々に救われていく道が開けるだろうにと、残念でしかたありません。

釋　芳英